

日本史は世界史の中にどう位置づけられるのか？

—グローバルヒストリーの枠組みから見た日本の律令国家—

ジョーン・ピジョー*

皆さま、こんにちは。南カリフォルニア大学歴史学部教授のジョーン・ピジョーと申します。専門は日本の前近代史で、日本国外で日本史を教えています。研究成果は英語と日本語の両方で発表しています。こうした立場にあるものとして、研究をしていく中で日本の日本史研究者が使うのと同じの史料や学術論文を駆使しつつも、日本についてあまり知らない人たち——それは世界の他の地域の歴史学者であつたり一般的な読者であつたりするわけですが——彼らにとつても、興味深く、かつ理解しやすいように説明していくように心掛けています。日本国外に日本史研究の世界を広め、日本史に興味をもつ人々を増やしていくという点では、私は異なる学界を結びつける一種の橋としての役割をしていると言えるでしょう。

こうした役割を果たしていくためにすべきこと、出来ることは色々あると思いますが、私が行っているのは、日本を対象にした研究以外でも使われている視点を自らの研究に取り入れ、比較したり類似点などを導き出していくという方法です。そうした方法は、日本について学び始めたばかりの学生などに日本史を理解させる上で、特に役立つと思います。

今まで私が研究対象として取り上げてきたものには、古代の王権、中古の婚姻と家族の歴史、都市としての京都の歴史、また東大寺の荘園を中心とした荘園史などがあります。こうしたテーマで日本史について研究し、その研究成果を執筆して

いく中で、私が重視したのは日本史を世界史の中に位置づけることでした。これがどういうことを意味するか、お分かりでしょうか？

古瀬先生から今日の講演に招待された時、この機会に古代の王権についての研究を一例として取り上げ、私のアプローチの幾つかの面をご紹介しようと思ひました。それと同時に、日本古代の王権についての研究が世界の王権の歴史の研究にどのように役立つものなのかを示したいと思ひます。

1997年のことになりますが、私はThe Emergence of Japanese Kingship: From Himiko to Shōmu (日本の王権の誕生：卑弥呼から聖武天皇まで) という題の本を出版しております。ここで私が明らかにしようとしたのは、どのような歴史的経緯を経て8世紀に天皇が日本を支配するようになったのか、また天皇の支配とはどのようなものであつたのか、そしてどう支配したのかということでした。それを明らかにするために、王権というものが何であるのか、どういうふうに分けるかを示すテンプレート (template) がまず必要だ、と考えたのです。研究を進める上で用いた史料は殆ど日本語でしたが、そのテンプレートを作成するために、インドや東南アジア、ポリネシア地方、中国など、世界の他の地域における王権や国家形成についての研究書も読んで参考にしました。この点において、その本は世界史における日本の王権のケーススタディという形になっています。

この本を書く準備の第一段階は、私が「王権の考古学」と呼ぶ方法論から始まっています。な

*南カリフォルニア大学教授

ぜ「王権の考古学」と呼ぶのかといえば、それは私が日本の王権の発展の過程とそこにおける重要な画期点を、様々な資料とそれまでの研究成果から発掘していったからです。この方法では、卑弥呼から聖武天皇に至る日本の王の歴史を7つの時代に分けて、それぞれの時代を調べながらそれに関連する物事を選び出していく作業が必要でした。日本では当たり前のことであっても、日本国外の人々にはその時代の歴史的な脈を説明しなくてはならないからです。

本を書く準備の第二段階として考えなくてはならなかったのは、王権とはどのように分析できるのか、という問題でした。もしこの大きな問いへの答えが見いだせるのであれば、日本の天皇とはどんな君主であったのか、どのように天皇は支配したのか等の日本の王の歴史に関する諸々も整理できるはずだからです。この問いに答えるヒントを得るために、世界各地の王権についての研究書の他、文化人類学の書籍も幅広く読みました。文化人類学は、社会構造や、その階層、国家形成、そして文化変容などを研究しているわけですが、これらは全て統治の問題と関係しているからです。

古代日本の王権を理解するために卑弥呼から聖武天皇までの時代を7つに分け、色々な研究書を読みながら、それぞれの時代の特徴を何度も何度も考えていきました。そうやっていくうちに、王権の基本的なパターンが見えてきたのです。その結果出来たテンプレートには、日本の王権を構成する次の5の項目が分析対象として挙げられることになりました。

- 1) 「王のイメージ：すなわち、王は自分をどのような存在として見せようとしたのか」
- 2) 「王に仕える臣下としての朝廷と、儀式を行う場としての朝廷」
- 3) 「王と朝廷を支える国家の財政」
- 4) 「王族と王位継承」
- 5) 「人民と土地の支配」

このテンプレートを基にしたことにより、古代

日本の王権と国家形成に関する研究を王権研究という研究分野のケーススタディのひとつとして位置づけることが出来るようになったわけですが、それは世界史における政治的リーダーシップのひとつのケーススタディということも出来るでしょう。

では、これから古代日本の王権の発展の歴史を理解する上で重要な要素を整理し、それぞれの特徴を明らかにする上で、このテンプレートがどのように役に立ったのかについて説明していきたいと思います。

王のイメージ

先に述べた5つの項目のうち、特に重要なものとしてあげられるのが、1) 「王は自分が支配する人々に対して、自分をどのような王として見せようとしていたのか」という、王のイメージに関することでした。この問題について考えをまとめるに際し、役に立ったのがA. Mホカート (Arthur Maurice Hocart)、J. G. フレイザー (James George Frazer)、C. G. セリグマン (Charles Gabriel Seligman) などの王権に関する古典的な研究です。

例えばホカートは、空の王、地の王、そして戦士の王について論じています。フレイザーは、神聖な支配者として色々なパターンを挙げていますが、そこには雨を降らせる王、占い師としての王、癒やし手としての王、シャーマンとしての王などがあります。そしてC. セリグマンは、神としての王とは自然に対する権力を持つ者であり、またあらゆるものの幸福の責任を担うものだと定義しています。こうした聖なる支配者に対し戦士の王という存在があるわけですが、この戦士の王というのは、世界の多くの地域で馴染みのある存在です。全ての王朝が戦いの場から興ってきた中国などは、その良い例だと思います。

しかし日本では、少なくとも7世紀に変わる推古大王の時代から、大和朝廷で出された王のイ

メージは朝廷の指導者としてのもの、また祭祀者としてのものであったことが史料から分かります。頂点に立ち、また神と仏の後継者としての聖なる地位を持っていることが重要だったのです。当時の日本で戦いがなかったわけではありません。戦いは時折起っていました、日本の場合、それを導いたのは戦争の王ではなかったのです。

大和朝廷の王の支配とはどのようなものだったのかと考えを巡らすなかで、私の頭のなかに何度も繰り返し浮かんでいたのはインド研究者のルイ・デュモン (Louis Dumont) の研究でした。デュモンは二つのヒエラルキーがあると言います。ひとつは身分によるもので、ひとつは権力によるものです。身分が重視される社会では、政治的な権威は指導者が神聖なるマナ——自然を動かす力——を有していることから政治的な権威が生まれます。デュモンが「prestige society：特権的な社会」と呼ぶこうした社会では、権力のヒエラルキーは未だ発達していない状態にあります。身分による差を作り出し、それを維持することが支配者の主な関心であり、王はその頂点に立ち、人々に命令を下す立場のものとして存在しているのです。

日本の王権についての研究を進めるなかで、6世紀後半から7世紀の飛鳥時代の大王がこのような身分制度の頂点に立つ支配者として機能していたことには確信を持っていました。当時の大王は、自分たちが神と仏の祭祀者として聖なる地位を有し、頂点にたつ特権を持つことを利用し、自然現象をも支配できる存在だと人々に示したのです。また朝廷の中だけではなく、外に地方豪族においても、位階や贈り物を与えることによって、列島のエリートを朝廷の特権的身分制度のなかにより確固とした形で入れ込んだのです。そして時代が移り7世紀後半の天武大王の時代には、大和の大王は神としての王の地位を示すことになります。

またデュモンと同じくインドの王権を研究しているスタンリー・タンビア (Stanley J. Tambiah) という研究者がいるのですが、タンビアも古代の

インドの王としての身分が中央と地方を結びつける上で有効だったと述べています。中央には政治的権威のある存在があり、地方には比較的自治性を有する権力者がある。そして両者のつながりは時には強くなることもあれば、時には弱くなることもあるのだと。タンビアは、このような王権モデルを「Galactic Polity：銀河国家」と呼んでいます。彼の理論は太陽の周りを回る衛星のようなイメージを思い浮かべて頂くと分かりやすいかと思います。インドの場合、カリスマ的な頂点に立つ王というのは戦士でもあり祭祀者でもあるのですが、また国を大家族として考えるので、「国の夫」としての役割をも担い、地方の権力者から女性を自分が居住する都に連れてくる存在なのです。

この「銀河国家」のモデルは、日本の古墳時代から飛鳥時代にかけての、またそれ以降の奈良時代における日本の王権を考える上で、示唆に富むものだと私は思います。しかし、日本の場合はインドとは事情が異なりました。日本では、王としての特権や神聖性、また大陸との交流によって得られた新しい知識や技術が、人々を従わせる最強の支配力だったのです。

朝廷とは？

では、もし古代の日本の王たちが自分たちを特別な特権ヒエラルキーを築き、それを維持していた頂点に立つ聖なる人物としてみなしていたのであれば、彼らの朝廷というのはどんな役割を担っていたのでしょうか？

歴史社会学者のノルベルト・エリアス (Norbert Elias) には「宮廷社会」についての研究がありますが、彼の考えは「律令天皇」ともいえる大和朝廷の大王とその後継者たちが、どのようにして自分たちに人々を従わせる宮廷 (朝廷) のヒエラルキーを作り上げ、維持したかを理解するためには非常に役に立つと思います。エリアスは、このヒエラルキーを作りあげる過程を「configuration：

王の臣下の順位付け」と名付けています。

具体的には、エリアスは宮廷社会とは一箇所に固定化され、高度に区別化された機能を持つヒエラルキーであり、朝廷に仕える臣下にとっては自分たちの生活の中心として機能していた場であり、彼らにとって、王は常に最も重要な存在だったと定義しています。王がそうした臣下を順位付けする際、その目的とは何か。それは、臣下が常に王に依存するような関係とヒエラルキーを作り上げることにあっただとエリアスは論じているのです。

エリアスはまた、王がどのように新しい規則をつくり、宮廷内の身分を定め、そこに属するエリートを引き寄せるか、それらのプロセスについても論じています。宮廷に属した場合、エリートはその見返りに（特権的な）身分や恩恵を受けとることになります。このような宮廷の「順位付け」がうまくいった場合、宮廷は国中のエリートを惹きつける身分と文化を提供する中心組織として機能します。そのため、そこに属するためには、王に従属することも厭わなくなる。この点、エリアスの宮廷社会というのは、デュモンの特権的なヒエラルキーの一種として理解できるかと思います。

日本の場合、7世紀初頭の推古大王の時代が朝廷社会の形成にとって重要な時となりました。推古は、天に輝く北極星のような王のような偶像的なイメージを、自らに対して描いていました。大陸との交流が盛んになり始めた中で、『論語』といった中国古典で称賛の対象となっている理想的な王としての姿を示そうとしていたのですが、ここでは支配者というものは北極星のようなものと強調されていたのです。「徳によって政治を行うものは、北極星に例えられる。北極星はその場所を動くことはなく、全ての星は北極星に向かって輝く」のだと。そうした古典や仏教に関する知識を有していることが、廷臣として推古の朝廷でうまくやっていくためには必須でした。

また、厩戸皇子が作った十七条（いわゆる、

十七条の憲法）にも、大王が揺るぎのない最上位にあることが繰り返し述べられています。この十七条は、皆さまもご存知の通り、朝廷において期待される、また正しいふるまいについて詳細に述べたものですが、その飛鳥の朝廷とは日本列島だけに留まらず、当時は先進国であった大陸の文明に関する知識を中心に構成された場であったのです。この十七条と冠位十二階の制度が個々の廷臣を対象にしたものであることを考えると、廷臣一人一人が大王の規則に従うことによって、氏族を基盤とする古い伝統を超越したということも言えるでしょう。また推古大王の時代では、朝廷がおかれた飛鳥の地だけではなく、他の地域においても地方豪族に対し国造という称号が与えられています。こうした称号は当時大王とより深い、また強い結びつきがあったことを示すものです。国造らは朝廷に様々な支援をする代わりに、大王から贈り物や位階を受け取りました。日本中にある古墳からは、こうした贈られた贈り物がたくさん発見されることがあります。

今まで見てきたように、エリアスの「宮廷社会」はデュモンの特権的なヒエラルキーがどのように機能するのかについて示唆を与えてくれます。もうひとつ、示唆に富んでいるアプローチとして皆さんにご紹介したいのが、ジャワの王権について論じているクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）の論です。ギアツは、王と宮廷は「exemplary center：模範的な場」とであると論じています。これはどういう意味かというと、宮廷は王が自分のイメージを普段演出するための儀式を行う場であり、そしてそこで作り上げられた王のイメージが、宮廷から全国各地に色々な儀式を以て広められるということです。これをギアツは劇場国家と呼びます。

宮廷は劇場国家における模範的な場であるというギアツの理論は、特に天武と持統大王の王権を考える上で、非常に役立つものだと思います。天武が造営した飛鳥浄御原宮、そして持統が造営し

た藤原京では、数々の儀式が行われたことが文献史料から確認できます。また天武の時代から、寺院でも大掛かりな儀式を大王が催す例が多く見つかるようになりますが、こうした儀式は廷臣や遠くの地方豪族らも呼び出して、彼らの前で行われていました。これと同じ時代に「大王」の代わりに「天皇」という新しい称号が使われるようになり、大王は神だと主張するようになったのは、偶然ではなかったのです。皇位継承の儀式、仏教の様々な儀式、清めの儀式、法の制定に関する儀式。これらの儀式を通して、朝廷は天皇が中心に立つ模範的な場であるとの認識が、誰の眼にも明らかになっていきました。こうした儀式はきちんと組織化され、飛鳥時代以降も特権化したヒエラルキーを広め、固められていったのです。また、国家の基本法としての律令のうち、隋や唐では刑罰の法である律に重きが置かれたのに対し、日本では王の特権的なヒエラルキーを都から地方まで幅広く敷かれた政府組織のなかに位置づける令の方が重視されたということも、忘れてはならないことです。

律令化の過程

日本の王権の発展を考える上で欠かすことができないのは、いかにその王国が統合されていったかという過程です。私はその過程を「*ritsuryō process*：律令化の過程」と呼んでいます。特に淨御原令、大宝令、養老令といった令は、単に新しい行政組織を生み出したわけではなくて、これらの令が果たした役割は、それよりもはるかに大きなものでした。こうした令こそが、日本最初の政権に繋がる過程を緩やかに進めていったのだと私は見えています。言い換えれば、その過程は王の特権的なヒエラルキーが日常化したものということになるでしょう。

ひとつ注意して頂きたい点があります。ここでは「国家」という表現を使いませんが、それは中

央と地方との繋がりが継続的なものではなかったという状況があるからです。当時の政権は、地方と継続的なつながりをもつどころか、むしろかなり分割されていました。地方を治める郡司は世襲で、その地に根付いた支配者の元、かなり独立した支配が行われていたのです。しかし時が経つにつれて律令化が進み、王国が統合されていきました。

私はこうした律令化の過程を、3段階に分けています。第1段階は、律令の編纂そのものが行われた段階。そして8世紀初期に、数十年間かけてこうした律令が機能し始めたのが第2段階。この中間期は、新しい律令が形を整え、実際に施行されるようになるまでにどのくらいの時がかかったのかを示しています。地方官庁の設立や新しい行政制度の導入などがその例として挙げられるでしょう。最後に、律令が社会に浸透してくるのが第3段階です。国の隅々まで律令を実際に機能させるために必要なネットワークが出来あがった段階で、聖武天皇の時代になります。

国を統合する律令化の過程には、模範的な場としての天皇と朝廷と、地方を結びつけるネットワークが3つあったと私は考えています。ひとつめは、官僚的なネットワーク。これは役人らのことを指します。もうひとつは地理的なネットワーク。それは、中央政府と地方の国府や郡家をつなぐ道からできたネットワークです。そして、3つ目が聖なるネットワークとなります。神や仏に祈りを捧げるための儀礼的な場所が作られ、天皇がその主たる後援者として存在しました。これら律令化に貢献したネットワークは段階を経ながら発展していきましたが、その過程で天皇の特権的なヒエラルキーが組み込まれていくことにより、さらに大きな影響力と富が天皇に集まることになったのでしょうか。

英語で書かれた日本史の教科書には、奈良は素晴らしい都市で、東大寺は8世紀の頂点を示すものとして紹介されていますが、実は律令化の過程

とは、決してそのような楽な道のりではありませんでした。特に第3段階においては政治的、社会的、色々な問題がありました。東大寺は一面では律令化が成功したことを示していますが、第3段階でみられたいろいろな問題の結論としても、東大寺の役割を考えなければなりません。

なぜ聖武天皇らは大仏を作ろうと決めたのでしょうか？また8世紀半ばの時代において、律令王権にとって東大寺の重要性とは何だったのでしょうか？これらの問いに対する私の考えは、次のようなものです。

天武や持統大王の朝廷はこれまで以上に地方のエリートを取り込んで拡大したため、都をより大きくし記念碑ともなるような寺院を建て、総合的な法律を制定したいといった野心も高まりました。その結果、だんだん聖なる王をその中心に据えただけの、前時代の特権的ヒエラルキーでは物足りなくなったのです。また持統の死から聖武天皇の即位に至るまでには長い年月が空いてしまいましたし、聖武天皇の治世では酷い自然災害や疫病や政治紛争が立て続いて起こりました。そのため、特権的なヒエラルキーを再び強化し、律令化の動きも促進させなければならなかった。王権が危機に瀕するようなこうした状況では、それまでとは異なった王のイメージを作り出し、人々に対して、どうして天皇と朝廷が必要なのかをうまく説明しなくてはならなかったのです。

社会がこうした難しい状況になったとき、その時の朝廷の指導者は何ができるのかと考えていくなかで、私はイタリア史の研究者アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) が「cultural hegemony: 文化的覇権」と呼んだ概念に手がかりがあるのではないかと思いました。グラムシによると、この文化的覇権とは幅広い様々な社会団体に訴える世界観で、指導者にとって利益になるものが社会全体にとっても良いのだ、というものです。そこで聖武時代の状況をこのアプローチを使って見てみると、聖武天皇が東大寺を造っ

たのは、仏教の智識を抱え込むことによって、グラムシの提案したような新しい世界観を王国に与えるためだったと解釈することが可能になると思います。天皇であり、また仏教の知識王でもあった聖武天皇は、日本全体のエリートたちに大仏を建立する目的は彼ら全てを救済するためなのだから、彼らは天皇に奉仕せねばならないのだと大掛かりに示したのです。また『続日本紀』や『東大寺要録』をみると、廬舎那仏建立に尽くした郡司達が位階を授かり、永遠に私財と出来る墾田を持つ権利を与えられていたことも分かります。グラムシの文化的覇権論で述べられているように、指導者に協力するものには何らかの形で恩恵が与えられることになっています。その恩恵とは神聖な何かである場合もあれば、物質的なものであることもあるわけで、ここではその聖武時代のケースがぴったり当てはまると思います。

ここで繰り返して述べておきたいことがあります。それは、その当時の社会には権力のヒエラルキーは未だ発達していない状態であったということです。国を統合した律令ネットワークは、中央によって押しつけられたものではありませんでした。それらは、天皇の役人として日本列島中にいる郡司らによって動かされていたのです。こうした郡司の大半は、飛鳥時代から、あるいはそれより前から大和朝廷の王に仕えてきた地方氏族の出身でした。

さきほど律令化の過程の3つのネットワークが、律令王としての天皇とエリートとの結びつきを日常的なものにしていったと述べました。全国各地にいた郡司達の眼には、こうした日常化した結びつきは、自分たちにとって利益を得られるものだと映ったことでしょう。こうした郡司たちは先に述べた3つのネットワークを通じて、天皇を中心とする中央政府と中央の文化に近づいていきました。彼らが中央に近づいて行った理由としては、中央でしか得られない知識や技術や他の賜り物ものが手に入るということがありました。

エリアスの言葉を借りるならば、役人を順位付けする上で非常に役だったのが律令だったと言えるでしょう。こうした順位付けられた役人のなかには、都にいる貴族もいれば、全国各地の郡司もいました。律令化が頂点に達した時、天皇は仏陀の弟子として、劇場国家をもっと力強くするためにいろいろな儀式を行い、同時に全国で同じような儀式を官僚たちが行いましたが、そこには理由が二つありました。その二つの理由とは何か。ひとつは人々を救済するためでしたが、もうひとつは律令化を確実に進めるためだったのです。

おわりに

本日の講演の冒頭で、日本国外で古代日本の王権の研究について研究する上で私がとったアプローチを紹介すると申し上げました。何世紀にもわたる古代日本の王権の特徴を分析し論じるに際し、古代日本とは一見関連のなさそうな他の国々、また異なる時代に関する王権や国家形成などの研究からも有益な知見が得られるということ、それについて少しでもお分かり頂けたのではないかと思います。このようなアプローチを取ることに、違和感を感じた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、こうした方法論により日本についてほとんど知識のない読者にも日本の場合はどうなのかという形でその特徴を分かりやすく示すことができ、また日本史を世界史の枠の中に位置づけることも出来るようになるのです。

ご清聴、ありがとうございました。